2024 年 2 月 25 日 蓼科親湯温泉　みすず Lounge & Bar

『「まちライブラリー」の研究―「個」が主役になれる社会的資本づくり』（みすず書房）
出版記念の集い
まちライブラリー提唱者・礒井純充　講演詳録

礒井純充ご挨拶

今日は雪の中、北は北海道の方、西は下関の方、それから大阪からは高校生も来ていただいて、私にとっても嬉しい日です。

今日のこの日を誰かが第二の結婚式か生前葬かって言ってましたけど、私にとってハッピーな時間となりそうです。まさか、みすず書房さんから自分の本が出せるなんて、今まで考えたこともなかったんです。数年前に企画書を出させていただいてから、それを辛抱強く育てていただいた編集者の方がいらっしゃって、何とか上梓することができました。

こんな山のなかへ来ていただいた理由の一つが、ここ蓼科親湯温泉は 2018 年から「みすず Lounge & Bar」と呼ばれている本の場があるからです。今日は残念ながら親湯温泉の社長さんは所用でお越しいただけないんですが、ここにあるほとんどがその方の蔵書で、今 3 万 5000 冊ぐらいで、約 2 万冊が社長の柳沢さんの蔵書と聞いています。なぜみすずラウンジかというと、ここ長野県茅野市は、みすず書房創業者の小尾俊人さんのご出身地なんです。またこの山を越えた諏訪市は岩波書店創業者、岩波茂雄さんの出身地で日本を代表する人文科学系の本の出版社がこの地域から出てきたっていうことは感慨深いです。今日みたいな会がこの地でできるのは本当にありがたいことです。

蓼科親湯温泉には、この本を書く 5 年ほど前に来ました。ちょうど冬の時期で、この本気の本棚をみて、社長の思いが伝わってきました。私がいつかみすず書房で本を出せることがあればこの一角に私の本も置いてもらえますかって社長に聞いたら、いいですよって言ってくださったので、それを励みに一生懸命書きました。

50 年後、100 年後に届ける手紙のつもりで書いた博士論文

それでは、本の話に入っていきたいと思います。『「まちライブラリー」の研究』。副題は、『「個」が主役になれる社会的資本づくり』となっています。

2016 年に大阪府立大学の大学院経済学研究科の博士後期課程に入学して 4 年かかって博士論文をまとめ 2020 年 3 月に受理されました。この 4 年間は私にとっては、人生で一番大変な課題を与えられた気がしました。いろんな仕事をしましたが、全然やり方が違う。大学の研究や論文の世界観と、実業の世界観は違ううえに、修士課程を経ないで特別に別の論文や実績報告をして博士課程に入れていただいたので、勝手もわからず居心地が悪く戸惑いの連続で、挫折寸前でした。そんな折に「いい機会じゃないですか、博士論文っていうのは 50 年後、100 年後に届けられる手紙みたいなものです。あなたが生きてる時代に誰かに読んで評価してもらおうと思うから大変なんであって 50 年後、100 年後に届けるようなつも

りで書いてください」と言ってくださる人がいました。それが腑に落ちて、そうかと一生に 1 回しかないチャンスかもしれないから、博士論文を出そうと思ったんです。この間、伴走して資料をまとめてくれたスタッフにも助けられました。結果、受理をされたのですが、博士論文は言いたいことの全てを書くわけにはいかない。むしろどちらかというと論旨をはっきりさせて、査読に耐えうるように削っていく作業になる。データで裏打ちのない私自身の意見や推測を削ってまとめたのがこの博士論文です。

自分の視点をもちかえる、現在につながるフィロソフィーとの出会い

ちょっと大げさかもしれませんが、この本の出版でようやく私の遺言書を作ったと思います。自分が人生の中で直接会って伝えることができる人って限りがあると思うんですが、これを何十年か後に読んで 2024 年にこういうやつが生きていたんだなと考えてくれる人がいてくださることを切に希望しながら本を作ったつもりです。

特に副題にある、「個」が主役になれるというのが、私の言いたいことの全てなんです。私自身も 42 年と 1 ヶ月間サラリーマンをやってきました。決して順風満帆ではなかったけど会社の仕事も頑張ってきたつもりだけど、こういう生き方でよかったんだろうかともんもんとしていた時代もあったんです。しかし自分なりの視点でもう一度やってきたことを整理すると、全て自分の今日に繋がっているということがわかってきました。それが理解できた自分にとって、次の若い世代の人に、目の前の組織とか地域とか、そこの枠組みに負けないようにしてくださいね、自分の視点をかえればいいんですよ、ということをこの本で伝えたいと思うし、自分自身も再度確認したいと思ってこの本を書きました。

この中に出てくる友廣裕一くんが私にそれを教えてくれ、彼が紹介してくれた早稲田大学の友成真一先生が、「問題はタコツボでなく、タコだった！？」という本で、我々が蛸壺っていう器ばかり気にすると。会社や組織という器ではなくて、中にいる人のほうが大事なんですよという考え方を、2010 年ぐらいに私に教えてくださった。このおふたりの力によって、まちライブラリーのフィロソフィーができてくる重要なポイントだったと。私はご承知のように森ビルという会社にいました。世間的には東京のトップランナーに行こうというイメージですが、本当はそんな会社ではなかったと思うし、いつの間にかブランドになっていって、中にいる人もだんだんそんな気になっていきました。そういう世界観をずっと横で見ながら、自分も感化されていたところがあって、目線が上から下を見てるような感覚をもっていたんだなということを先ほどの 2 人に教えてもらった。あなた自身がどういう生き方をするのか、どういう価値観をもつのかということをやるべきだっていうことを、このときに教えていただいたので、10 数年この活動が続けられているんだと思います。

本の内容紹介　はじめに

この本は 8 章立てになっていまして、「はじめに」を読んでいただくと概ね、何を言いたかったのかご理解いただけると思います。

要は今みたいな話なんですが、いろんな傍証を出しながら、まちライブラリーという活動で得た知見を

徐々に読み解けてきたことを、まとめてあります。

第1章　まちライブラリーが生まれた背景と基本概念

1 章です。今、我々を覆う息苦しさがどこから生まれたか、特に日本がバブルがはじけて右肩下がりになってからですね。いろんな経営手法が出てきて、KPI とか、エビデンスがないと駄目だとか、仕事の効率性を評価軸にしますってことを言う人が出てきて、一つの価値観に統一されてしまった。

何か錯覚が起こっちゃったんじゃないか。世の中の価値観は変わってるし、グローバル化っていう言葉の中に埋もれてしまっている。我々の生活全てをどこでも誰でも同じようにするために、我々の産業や商品やサービスがあると言われたら、じゃあ俺いなくてもいいのねって話になってしまう。私も六本木ヒルズで大きな文化事業をやりましたけど、その事業も最初は小さな私塾で、10 人か 20 人ぐらいの人をゼミにお招きするような形のときは、人間関係も良かったのに、だんだんそれを立派な場所でやろうと思えば思うほど収益性を上げなきゃとか、成績を上げなきゃということだけに汲々として、昔から付き合ってた人との人間関係を捨てていく。そして効率さえ良ければいいという人たちを招き入れてしまった。結局、最後は自分もそこからぽんっと捨てられてしまった。そのときに友廣さんとか友成さんに出会って、いや蛸壺じゃないんですって、人生はこっち側なんですって言われたときに、ちょっと腑におちた、そういう感覚が 1 章に書かれてます。

奇しくも今年の 6 月に六本木アカデミーヒルズがなくなることを聞いたある人が手紙をくれて、このまちライブラリーにある程度遺伝子外情報が残されたんだから良しとしようよ、と言ってくださったんですが、まさに僕もそう思います。僕はまちライブラリーの形をずっと残したいと思っているわけじゃなくて、考え方を別の形でも掴んでいただければいいかなと思っています。

第2章　まちライブラリーの実践活動から得た知見

2 章からは、まちライブラリーの軌跡です。紆余曲折の軌跡を書いているのは 1000 か所できたまちライブラリーを作ることがゴールだと勘違いして活動する人たちが出てきちゃうのが心配だったからです。私は 1000 か所作るとか、数を増やそうとかじゃなくて、自分の居場所作りをずっとしたかった。私はとにかく六本木ヒルズからできるだけ遠いところで仕事をしたかった、そういう下世話な理由で活動が始まった。

最初に Twitter で「奥多摩とかでやれたらいいね」とツイートしたら、そのツイートを受けて、奥多摩に縁ができたりとか、そのうち大阪の大学でやってほしいという人が現れました。大阪府立大学ですけど、そしたら大阪に月 1 回ぐらい行けそうだなっていう逃げからスタートしているんです。そのうちにだんだんそっちが楽しくなってきて、その出会いの方が面白くなってきた。もちろんここに書いてあるように紆余曲折しています。紆余曲折からの自慢話をしたいわけじゃなくて、世の中はそういうもんだということを自分の中でも再認識したいし、偶然、友廣くんに出会った。その出会いを自分なりに諦めず、教えてもらった最初の種を育てていったら、こうなりましたということが書かれています。

第3章　まちライブラリーの広がりと多様性

3 章はまちライブラリーの広がりについてです。今日で 1112 ヶ所登録され、15%ぐらいの人がやめて

います。やめてもいいんです。継続することにまちライブラリーの意味があるとは思ってなくて、何か気がついて始めて、一回休んでまた再開する人もいます。

本だってそうですよね。最初から読み始めて1章読んでちょっと行き詰まっちゃって、でもまあ置いとこうと。人生も同じなんで、1回始めてずっとやることだけが目的になっちゃうと疲れますんで、やめることはいいと思います。

今1100ヶ所中海外では、ロンドン、シアトル2ヶ所、台湾にあります。これは日本人の方が日本で出会って、赴任してやっているか、あるいはシアトルのように、赴任者がどんどん本を置いていくことで始まりました。アメリカで本を買うってすごく高い。それを持って帰ろうとするとこれがまた高い。そうするとむしろ置いていって次に赴任してくる人に読んでもらった方がいいと、おそらく 2 万冊くらいの本棚がシアトルに 2 ヶ所できています。それもまちライブラリーに登録してくれて、私もいつか行ってみたいところです。

47都道府県ありますが、46都道府県に広がってます。1ヶ所、愛媛県だけないんです。愛媛県でもしご縁がある人があったらぜひやってほしいです。（※2024年3月に愛媛県でも登録されました）

約10%が公共の場所で、90%は民間の場所です。運営者は、個人が約6割、小さな団体が2割で行政や企業が2割ぐらい。ちょうど6:2:2です。過半は個人の方がやっておられて、ものすごく多様なとこで広がってますよということが 3 章に書かれています。それぞれが設置したいところに設置していくということです。ちなみにここもまちライブラリーの登録をしていただいています。

第4章　まちライブラリーの運営者と利用者の実態

4章は、運営者とか利用者はどういう人なのかということが書かれている。アンケートをしたり、ヒアリングしたり。ここでのポイントは、うまくいく人とうまくいかない人の事例なんです。まちライブラリーって、確かにいいことをやってるように見えるんだけど、別にいいことやろうと思って始めたわけじゃなくて、六本木ヒルズからできるだけ遠いところに行きたいという斥力によって始められた活動なんです。要するに逃げから始まって、みんなが面白いとか、いいって言ってくれるから、これいいんじゃないかなと自分で逆に勘違いをして、どんどん後付けで意味づけていってそれがさらに良くなったということなんです。実はうまくいかない人の大きな理由は、最初から目標を持ってる人なんですね。商店街に置いた以上は、ここが商店街の中心にならなきゃとか、あるいはお店の売り上げを上げたいとか、こういう人たちはうまくいかないとすごくストレスを感じている。逆にうまくいく人って、最初からコミュニティの場所を作ろうなんて思ってませんっていう人。その人は児童書だけ集めたかったんですね。子供の声がすきだから。児童書だけを集めてたら、近所の子が集まってきて、周りからみたらコミュニティの場所になっている。本にも出てきますけど、雫石の司書の方なんですけど、オカルトの本だけ集めてるんです。別に見に来てもらわなくても、今4000冊を超えていて国会図書館にもないもので私が一番だと思っていますと言っています。図書館司書だから普段は図書館運営に汲々としていて、まちライブラリーって運営が楽だわーって、本も登録もせんでいいし、持ってきたのをそのまま置けばいいやって言ってやってるんです。

外から見るとウェルビーイングのようにみえるんですが、内実は極めてセルフィッシュな自己愛的な活動で始めている人が、結果としてそれが人に役立つことがあるんですね。この辺はまちライブラリーもいくつか運営を委託されているところがあるので、スタッフとも話をしていても真面目な人が多いからきちんとサービスしなきゃいけないと思う人が多いけど逆なんです。サービスすればするほど、相手

側から出てくる自己愛的な行動を消してしまう可能性がある。むしろ寄り添っていればいい。相手が何か言ったらうなずいていれば半年くらいたつと、みんなが寄り添ってくれた人を頼りにする不思議な活動だと気づいてくる。

第5章　地域と人とまちライブラリー

5章は、まちライブラリーの広がりについてです。私は大阪出身で大阪市中央区で始めたんですが、研究当初に指摘されたのは礒井さんがやってるから広がってるんじゃないの？義理でやっているんじゃないのということでした。確かに最初はそうだった人もいると思う。でもそれはほんの1、2年なんです。別の人が他のまちライブラリーを見て、さらに他のまちライブラリーにつながる2次感染して 3 次感染して、そこから 4 次感染していくってことがよくわかる。そういう自然な広がりを持っていることが大阪市中央区とか、埼玉県鶴ヶ島市とか、あるいは北海道千歳市なんかで検証された。

千歳市のストーリーはすごく面白いんです。元々、北海道空港会社の子会社さんが絶対やめませんということで始めたんだけど、コロナ禍の影響で閉めざるを得なくなったんです。そしたら、2200 人もの市民が署名を集めて再開をしようということになって、それを受けた市役所が議会を開いて、臨時の予算をつけてくださった。その予算をつける議会に、高校生が 40 人近く集まってきて、俺たちのまちライブラリーがどうなるかを見届けたいという。これもまたすごいドラマが千歳に起こったんですね。またここ茅野市も含めた面白い事例がたくさん書いてあります。

第6章　まちライブラリーを活用した場づくりとは

6章は一番面白い章だと言ってくれる人もいます。そもそも「場」ってなんなんだっていうことに関して、かなり自分なりに考えました。

清水博さんという、東大の名誉教授で自然科学の先生が自己の卵モデルと言って、ボールにたくさん卵を割りいれると、黄身と白身にわかれる。黄身はひっつかないけど、白身はくっついて一緒になって、これが場なんだ、社会なんだって。要するに、我々個人で局在して見えるけど、実は今ここにある空気感がある種の親友の空気感になっている。これがあるから私たちは居心地よく存在しているわけです。

居場所論も面白いなと思って。英語にできない日本語と言われていて、居場所には意味があると。子供が学校に行かなくなって不登校の子の居場所論が出てきたり、お父さんが家で居場所がないから、ベランダでタバコを吸うというような居場所論になって、別の誰かを受け入れるっていう、そういう意味合いを持つのが居場所論だってことがわかってきました。みすず書房の『サードプレイス』(レイ・オルデンバーグ著)。この本はもう何年も前に買って読みました。タイトルの「サードプレイス」という言葉がいいです。よすぎちゃってスタバでもファミレスでもみんな「サードプレイス」を使う。家が「ファーストプレイス」で、「セカンドプレス」が学校とか職場ということでわかりやすいからみんな使うんです。でも多分、多くの人はこの本を読んでないんですよ。著者の社会学者レイ・オルデンバーグはこの著書の中で「インフォーマルな公共生活」って 72 回も書いている。特にアメリカのまちづくりを間違ってると書いている。アメリカ人は車で家と会社を往復してばかりで、ヨーロッパにあるような、例えばパリにあるようなカフェもなければ、ロンドンにあるようなパブもない。要するにみんなが普段集まってきて、ふらっと立ち寄ってそこで会話をする場がなくなった。そしてその場での会話のルールは、常連さんの雰囲気とマスターの雰囲気で決まる。これをサードプレイスというんだっていうことを言っている。原題

は「The Great Good Place」ですが、日本の編集者が極めて優れたキーワードをタイトルに使われて、これが独り歩きしたことがわかりました。このサードプレイス論を否定するわけじゃないんですけど、自然に手繰り寄せられるようにできている場所は大事なんだなっていうことを改めて気づいて、まちライブラリーを振り返ったときに、手を出していろいろ意図的な行為がなく、むしろ緩やかな人間関係によってつながっているんだと気づいたんです。だから今日、公共図書館の人も来られていると思うけど、何々を禁止するばかりではサードプレイスにならない。礒井さんの家に行ったらこういう空気感だねとか、友達にしたらこんな空気感だねということがあって、その中で我々がお互いの空気感を見て、ここではこう振る舞おうと決めていくのが本来のサードプレイスの意味だったのではないかなと私は思う。

このサードプレイスの著者、オルデンバーグがすごく褒めてる人がいて、それはジェイン・ジェイコブズです。『アメリカ大都市の死と生』って、これまた厚い本で、都市計画家に対する攻撃の本なんです。ニューヨーク生まれのフリーランスの生活情報を書いていた女性ジャーナリストで、この人が、アメリカの 60 年代にマンハッタン島の混雑を緩和するために高速道路計画ができて、これに対して猛然と反対するんです。都市計画家が作った児童公園では子供は遊んでないし、青少年施設で作ったバスケットコートは誰も行かない。大きな文化センターを作ってもそこの本屋はまともに育たなくて廃業になる。都市計画家は駄目だっていうことをかなり辛辣に書いてる。当時はもちろんですけど未だにこのジェイコブズ論に対しては、都市計画家は反発する人と、ものすごい親愛の情で見てる人と、二分化してるんです。要は、彼女は何を言いたかったかというと、まちのことは誰でも考えられるし、よく観察してればいいんじゃないかと、意図的な都市計画家や行政の計画がかえってまちを悪くしていると言っている。昔のニューヨークって、階段があってセサミストリートみたいに、おじいちゃんが座っていて、子供が潰れた消火器で水遊びしてたり、そういう見守りの姿勢があったんじゃないかと。それを道路を広くして、児童公園のために家を立ち退かして高層化し、ここはオフィス街、ここは住宅街と分けるから人がいなくてしまったんじゃないのかということを 1000 ページを超えるような分量で書いている。さっきのサードプレイスを書いたオルデンバーグと同じで、自然観察をしながら緩やかにつながったらいいんじゃないっていうことです。

これに対して、日本の経済学者宇沢弘文の『社会的共通資本』っていう本ですけど、この人、天才って言われた経済学者で、東大にいた頃は日本で最初にノーベル経済学賞を取るんじゃないかっていう逸材だったと聞いています。すぐアメリカに行って、経済学で愕然としたのが、マクナマラってベトナム戦争のときの国防大臣がいて、元々軍人ではなくてハーバードビジネススクールで MBA を取ってる経営者で経済学の素養がある人なんですね。この人が議会で証言するんですけど、議会から何年も戦費をつかって戦争してて、こんな効率悪い戦争やめろっていわれたら、いや俺たちは効率的に戦争してると。1 キロ四方にこれだけのナパーム弾を投下しベトコンをこれだけ殺す、この効用比率は素晴らしいという証言したんです。これを聞いた宇沢さんは、なんと俺はひどいことを経済学で教えてきたんだ。こういう人間を見ない経済家を育ててしまったのかと、いわゆる筆を折るじゃないけど、経済学を、近代経済学を折りたたんでしまった人だと思う。宇沢のいう「社会的共通資本」というのは、自然資本もあれば、電気、ガス、水道というインフラ資本があり、最後に制度資本があって、図書館もそのひとつであって、医療や司法制度などいろんな人が信託を受けてこれを運営してますよねっていうことを言っている。そして宇沢さんもジェイコブズを高く評価している。私が 20 代の前半ぐらいに読んだこの『アメリカの大都市の死と生』という本が、原点だったんだということに気付かされた。

この『サードプレイス』とアンニョリさんっていうイタリアの図書館コンサルの人が書かれた『知の広場』、そして拙著の三つの本が、場を考える、図書館を考える上で非常に大事な本で、しかも全部みすず

書房から出されてるってことが私は嬉しくて、この 3 冊が揃って初めてこれからの図書館のこととか、場づくりのことが少し紐解けるんじゃないですかと誰かが薦めてくれる、そういう日が来ることを願っています。

第7章　計画性や制度から自由で、自生的に生まれるまちライブラリー

7 章は、ジェイコブズや宇沢やアンニョリの本から入っていくんですけど、いま、公共図書館がすごく変わり目に来てますよっていうことは申し上げたい。そもそも公共図書館という言葉は、日本の法律用語にはないんです。図書館法では自治体がやるのは「公立図書館」、それから一般社団法人、一般財団法人とか赤十字社のやるのが「私立図書館」と定義し、それ以外に図書館的な活動は誰がやってもよいと書かれています。この「公立」という概念と「公共」という概念がいつの間にか日本では一体化しちゃったっていうところに難しさがあると思う。新聞社で、東京都立新聞社とか、国家国立新聞はないですよね。新聞とかテレビとか鉄道も、私立が認められるんだけど、図書館は公立しかないように言われる。この議論を公共図書館の人に言うと、お前は公共図書館なくしていいのかって言われ、いやそうじゃないんだと、公共図書館は公共図書館としてあってほしいんですけど、でも私立図書館と対等にあってほしいと。官報があっても、朝日新聞、読売新聞があるのが当たり前なのと同じように、我々の社会の中で個人や団体が作っていく私立図書館が対等にあっていいんじゃないか、私設のここのラウンジだって図書館って呼んでいいんじゃないですかっていうことを言いたいがために書いている。

明治の出だしにできた成田山新勝寺の図書館は、当初から開架式を採用していて、すごく自由度が高かった。昔の図書館は本棚のところに一般の人は行けなかったのね。書誌データを箱から引っ張ってきて、すいませんこの本を貸してくださいって。すごく貴重な本のときには必要ですけど、そうじゃない方法論もありますよということを成田山新勝寺の図書館はやった。私立図書館には、子供文庫とか地域文庫もありますし、みな対等で補完的に文化活動があった方がいい。そうするとリサーチしたいときは公共図書館に行こうとか、子供の絵本を探すならまちライブラリーとか、コミュニティの場所として鍋パーティーできる私設図書館があったっていいじゃないかっていう選択ができるんじゃないかなということを考えました。

では、小さな図書館ばかり作って、世の中うまくいくのかっていうことで、これで勇気を与えてくれたのは、ミルグラムというアメリカの社会学者です。この人は 300 人ほどのアメリカ人を無作為に抽出して、その人が親しい友人に手紙を送って、あるボストンの人に何人で手紙が届くかって社会実験を 1960 年代後半にしたんです。結果は中央値が 5 だったんです。つまりボストンから遠く離れた中西部のアメリカの人を無作為で選んで、普通の郵便で何人目に届くのかと思ってたら、6 人目ぐらいに届くことがわかったわけです。1990 年代に入り、ダンカン・ワッツが大学院の博士課程のときに、これを数学モデルで解いた。それがネイチャーにでて、なるほど世の中、実は小さな集まりでも大きく広がるんだということに気づかされて、これが 2019 年から始まったコロナのパンデミックで明らかに実証された。要するにほんの数人、市場で流行ったものが、全世界 80 億の人を脅威にさらしてしまった。我々は、自分の身近な人にしか会わないように思ってるんだけど、小さな活動がずっと広がっていく可能性がありますよっていうことを、このダンカン・ワッツが数学的に読み解いてくれたということで、私の活動に勇気を与えてくれたなって思います。

最後にアダム・スミスです。私もついこの間まで教科書にある「神の見えざる手」しか知らなかった人です。でも調べてみると、神の見えざる手っていうのは有名な「国富論」で 1 回しか使ってないことがわ

かって、先ほどのレイ・オルデンバーグが「インフォーマルな公共生活」を 72 回使ったことと明らかに真逆なんです。元々、スミスは道徳哲学の人で、1723 年にうまれ 1790 年に 67 歳の人生を終えるんですけど、18 世紀の英国人です。当時の社会環境から考えると、イギリス帝国がどんどん世界に広がっていった頃ですから、インドのものをヨーロッパで売れば、イギリス帝国が大きくなる、いわゆる重商主義的な考え方が主流だったころですが、それでは国は富まない。普通に生きている人たちが豊かにならない限り絶対に国は富まない。今日の GDP 的な考え方が生まれたわけですね。それを国富論の中に書いた。その中の一番有名なことばを冒頭に紹介しましたが、本では、今晩のご飯の肉だとかワインとかパンは、肉屋や酒屋やパン屋の好意で作ってくれているわけじゃない。私達が彼らの利得を考えない限り、彼らは作って届けてくれないということを言ってるので、人間のセルフィッシュな感情っていうモチベーションが、社会を豊かにするドライブフォースになりますよっていうことを言ったと思う。ただしこれ現在だと行き過ぎのところもあるけど、彼自身、もう一つ人の「共感」というキーワードを入れて「道徳感情論」って本を書いています。人間はどんな悪人だって、他人に何か関心をもって、子どもが溺れそうになったら助けようとすると。こういう気持ちを持ってるのが人間で、そういう両者の微妙な関係性が、我々社会を秩序立てていると言っています。

私がなんでアダム・スミスの話を最後に持っていったかというと、私はなにもウェルビーイングをやろうと思ったわけじゃないし、そうやろうとしてる人がむしろ行き詰まる。他人のためにとか、社会のためにと思う社会活動よりも実は、身近な自己愛的な、自分が受け入れられるかどうかっていう活動をしているうちに他人が受け入れて、自己効力感となり、それがドライブフォースになってまた広がっていく。まちライブラリーの広がりってそこに隠された原点があったことを知ってもらいたかったからです。社会活動をやっていく人も、環境を良くしようとか、世の中こうしましょうとか、世の中を主語に持っていけばいくほど他の人には他人事の話になる。あなた自身がこうしたらいいんじゃない、それが面白いでしょ、楽しいでしょうっていうことを言えば言うほど、実は資本主義が二百数十年間でとてつもなく拡大したように、社会活動も拡大していくんじゃないかなと考えたんです。

まずは個人を主語にして、「森ビルの礒井」っていう言い方やめませんか？ということを言いたいです。かつて仕事で「森ビルの礒井です」とあいさつすると相手は名前を呼ばないで「森ビルさん、森ビルさん」と呼ぶ。我々はまず私があって、それからそこで仕事しているだけなのに「組織」が自他ともに主になってしまう。組織が自分の人生ではないし、自分の価値観でもない。セルフィッシュに生きているように見えて、自分が確立していくから社会のなかに自分の役割を見出して、モチベーションを見出して、結果論として、社会のインフラを作っていったり社会の活動になったり、いろんな活動に広がっていく。どうも主語を反対側に持っていって、これからの図書館界は、これからの教育界は、、、ここに持っていけばいくほど、他者をアウエーにしている。つまり逆風をふかしてるだけですよ、むしろあなた自身を主体に持っていったら強い協力者が現れますよってことを言いたかった。

第8章　「個」が主役になるまちライブラリー

８章は読んでのお楽しみです。そういう考えもあるという個人的な感覚なので、皆さんなりに読んでいただきたいと思う。最後に私が皆さんに伝えたかったのは、私が主語になって、何かやることを作ってくだされば いいなと思ってこの本を書きました。

本日は本当にどうもありがとうございました。